

紅い花

フィナーレ

琉 紅

フィナーレ

北山が減び、中山は広大な領地を得ることとなった。

対する南山はあまりにも小さく、尚巴志、大君を中心とする軍師、彼らが率いる連合軍に、もはや抵抗する力はなかった。

やがて琉球は統一され、『琉球国』となる。

晴れ渡った空に穏やかな波の那覇の港。人々の声が雑踏の中、聞こえてくる。

その離れ島には、多くの交易品が集結するため、行商人が港を埋め尽くしていた。取引されたのか、琉球馬が数十頭、船の中へ入って行く。

東南アジア方面から帰ってきたばかりの交易船が停泊し、琉球に住む人にとって初めて目にする品々が次々に陸揚げされている。まるで、美久の部屋を見るようであった。

アジアの陶磁器や、鉄釜等に混じって西洋の物も点在してあった。酒、色彩グラス。大陸から運ばれてきた品々だった。

その一つに、真四角な木板を花の模様で粹取った、衝立てがある。山や川、海をあしらって彫り込まれている。

粗末な身なりをしているが、どこことなく品のある若者は、

その衝立ての花模様の淵を眺め、彫られた大地を指先でなぞり始めた。

やがて花で飾られた淵の左端が欠けていることに気がついた。

若者は袖から、紅色の花のかんざしを出してその部分に充てる。ほぼ、同じ色模様で、デザインの連続部分を補っている。

震える声で船乗りに尋ねた。

「これは、いったい」

「この世を表しているんだと」

若者は、かんざしを袖に戻し、彫刻された大地へ顔を近づける。

「これを作った国は？」

船乗りは、衝立ての左端（ヨーロッパ大陸）を指差した。

「明国のズーツと遠くだ、行くだけで相当かかるぞ。勿論、金も」

「無謀か？」

「ああ、そうだ」

船乗りは、若者が見ている部分と正反対の右端を指差した。その先には米粒ほどの大きさ、彫刻刀の削り残したような突起した部分があった。

「これが、おそらくこの琉球だろう」

「この世の全てが見たい」

と、若者はその削り跡から左に広がる彫刻の大地に触れた。そして船を指さす。

船乗りは首を振る。若者の腰に指している刀に目をやると、船乗りは身を乗り出してその柄を見た。

「大和の物か」

特に物欲しそうではなかった。しかし、鞘に目が移ると、

「おおっ」

と、不意に声を出した。

黒い漆喰に塗られた木の鞘に興味を持ちだしたのだ。表面は、これまでの戦いで付いた傷が多い。若者もその視線をなぞるように鞘を見た。特に大きな傷の隙間が、不思議と光を放っているように見える。

その船乗りには、とても魅力的らしい。

「その刀をくれたら、船に乗せてもいい」

若者にしばらくの沈黙があった。

船乗りも真剣な眼である。

若者はそっと、船乗りの手に刀を渡した。

「おい、お前の名は？」

「名前は無い。北の山から降りてきた」

「はっはっ、おもしろい奴だ」

「ほら、これを持って行きな」

船乗りは、刀と引き替えに自分の上着を脱いで若者に渡した。黄色を基調に船乗りの碇の印が入っている。

船乗りは足元から石を拾い、鞘の表面を軽く擦った。すると、表面を覆っていた黒の漆が剥がれ、金色の素材が見えている。おそらくその刀の鞘は、金で出来ているのだろう。船乗りはその面を隠すように、慌てて箱に仕舞った。若者は特に別れ惜しいという仕草はなかった。

刀もそれが自分の運命であり、受け入れるかのように静かになった。

入り口には中山の監視兵が立っていた。

若者は船員の薄汚れた黄色の服を羽織り、荷物を運び入れる労務者のふりをして、交易船に近づき市場を振り返る。

(きつと美久はここに来る。新世界を見るには、ここから出るしかない)

数人の役人が、那覇の港で美久の似顔絵を見ながら、探し出そうとしている。

薄汚れた着物を羽織った美久はゆっくりと、放心状態で港

の入り口に近づいてきた。

そんな美久を見つけた姉が、急ぎ駆け寄った。

他にも数人の女達が美久を取り囲み、男の着物に着替えさせた。

手刀で彼女の髪をばさばさと切り落とし、ある者は水たまりから泥を取って、頭、顔、腕周りへベタベタと塗り始めた。

彼女の体を黒く汚しているのである。どこから見ても、薄汚い少年にしか見えなかった。美久は、なされるままであった。

姉は手を引いて、港から連れて行くこうとするが、美久はそれを拒絶した。姉は、何故？ という表情に変わる。

質素な着物を羽織った老女が美久に近づき手を取る。無言の会話が取り交わされた。

美久は、顔を左右に小さく振った。両手、両腕の肌を露わにして傷を見せる。

瞳は、まるで子供が母親に、転んで手が汚れたと訴えているよう。

老女は、再び説得するように手を強く握り自分の胸に当てる。久高のヌルだった。

交易船と岸壁を結ぶ縄の最後の一本が、まさに解かれようとしていた。

若者はその作業を止めるように、縄の側で手を差し出す。同じ黄色の服を来た船員は、分かったと手を休めた。

誰かを必死に探し求める若者の視線に、美久は気が付いた。咄嗟に、探りの気を投げる。若者はそれを受け、思わず両手を広げた。

美久の顔に、幼き少女の渾身の笑みが戻る。

ヌルはその少女の手を離れた。水を得た魚のように勢いよく、走り出した。

役人は、一人飛び出した少女を盗人か、逃亡者と思い追いかけるが、人混みに邪魔されて追いつくことは出来ない。

天女が空へ舞い上がるうとしている姿、ふわりふわりと、飛ぶように駆けて行く。

少女は、自分の持つ全ての力を、今ここで出し切ろうとする必死な姿を見せた。

二人には、時間が止まって感じる。

世界は、動くのを止めて、少女だけの為に存在するかのよう。

両手を広げた若者は、少女を受け止め、力強く抱きしめた。少女の両足は地面から離れ、本当に空に舞い上がった。

若者が抱きかかえたのである。

そして船の中へと。

船は那覇の港を離れる寸前だった。

参考文献

二人は格好こそ粗末だが、最高に幸せだった。
少女の足元に白と茶色の縞模様をした子猫がいた。

子猫は、顔を摺り寄せじゃれてきた。

少女は、その子猫をそっと抱きかかえ頬ずりする。

名もなき紅い花は、少女の髪を飾った。

若者の眼差しは、愛情に満ち溢れた。

二人は遠く離れていく那覇の町、琉球国を見続けていた。

新琉球王統史 ② 察渡王、南山と北山（新星出版株式会社）
与並 岳生

琉球王国の歴史（月刊沖縄社）

今帰仁村史（今帰仁村役場） 今帰仁村史編集委員

沖縄の祖先祭祀（第一書房） 平敷 令治

了